

《研究ノート》

アダム・スミスにおける生産力と価値

一星野彰男『アダム・スミスの動態理論』(2018)によせて一

新 村 聡
(岡山大学経済学部名誉教授)

1. はじめに——問題の所在
2. 生産力価値説とは何か——『国富論』第2編第3章第32パラグラフの検討
3. 生産的労働と価値——『国富論』第2編第3章全体の検討
4. むすび——価値・生産力・経済成長

1. はじめに——問題の所在

リカードやマルクスの労働価値論では、投下労働量と価値量は比例し、投下労働量の増加によってのみ価値量は増加するとされている。たとえ労働生産力が上昇して生産される富ないし使用価値の量が増加しても、投下労働量が増加しない限り生産される価値量は増加しない。

ではスミスは、この問題をどのように考えたのであろうか。従来の通説では、スミスもこの点ではリカードやマルクスと同様であり、投下労働量が増加する場合にのみ価値量は増加し、投下労働量が増加しなければ、労働生産力が上昇して富の量が増加しても価値量は増加しないと考えられてきた。

この通説に対して大胆な異論を提起したのが星野(2002, 2010, 2018)である。星野は、スミスが「生産力価値説」すなわち労働生産力の上昇が価値を増加させるという見解を主張したという。その最大の根拠となったのは、スミスが『国富論』第2編第3章「生産的労働と不生産的労働」の第32パラグラフで次のように述べていることである。

[1]「ある国の土地と労働の年々の生産物の価値 (value) を増やすには、その国の生産的労働者の数を増やすか、あるいは、これまで用いられた生産的労働者の生産力を増やす以外には方法がない。」(WN, II, iii, 32 : 343, 訳 I : 536)

この引用文 [1] を読むと、スミスが「生産力を増やす」ことは「生産物の価値を増やす」ことになるという「生産力価値説」を主張しているように思われるかもしれない。星野(2018)はそう解釈し、さらにこの「生産力価値説」をリカードが批判したと主張する。リカードは、『原理』第20章「富と価値」で、次のように述べている。

[2]「一国の富 wealth は、2つの方法で増加しうることがわかるであろう。すなわち、一国の富は収入のより大きな部分を生産的労働の維持に使用することによって増加しうる。この方法は、商品の総体の量を増加させるだけでなく、その価値をも増加させる。あるいはまた、一国の富は、労働の追加量を少しも雇用しないで、同一量の労働をより生産的にすることによっても増加しうる。この方法は、商品の量を増

加させるが、その価値を増加させないであろう。」(Ricardo 1951 : 278)

このリカードの命題は一見したところスミスの生産力価値説に対する明確な批判を述べているように思われる。それゆえ星野 (2018) は言う。

[3] 「スミス『国富論』は、「労働の生産力を増す」ことが「生産物の価値を増す」ことになる（以下、「生産力価値説」と言う）、と明記している。これに対してリカードは、この「生産力」の見方が生産物の量を増すことを「価値を増す」ことに取り違えたものと批判する。」(星野 2018 : 75)

たしかにスミスとリカードの2つの引用文を読み比べる限り、スミスが生産力価値説を述べてリカードがそれを批判したと解釈することは可能である。しかし疑問点が多い。第1に、もしスミスが生産力価値説を主張しようと考えていたのならば、なぜかれはこれほど重要な命題を労働生産力について論じた『国富論』第1編で1回も述べなかつたのであろうか。また『国富論』第2編でも、スミスが生産物の価値増加について述べているのは第3章の3カ所だけであり、その1つは上述の引用文[1]、残り2カ所は本稿第3節で検討する引用文[5]と[6]である。そしてこれら3カ所のうちで、スミスが労働生産力の上昇と価値増加を関連づけて述べているのは[1]だけであり、残りの2カ所は労働生産力に言及せず、生産的労働者が価値を増加させると主張されている。つまり『国富論』の第1編と第2編の全体を見ても、労働生産力の上昇が価値を増加させると述べられているのは引用文[1]の1カ所だけなのである。このことはどのように解釈するべきであろうか。

第2の疑問点は、リカードによるスミス批判（かりに批判だとして）の方法に関連する。スミスの[1]は労働生産力の上昇が「価値を増加させる」ことを主張し、リカードの[2]は「価値を増加させない」と主張するのであるから、一見したところ両者の見解は対極的である。しかし疑問に思われるのは、リカードの[2]がスミスの名前に言及していないことである。リカードは[2]の直前でスミスの支配労働価値論を批判するときにはスミスの名前を明示して批判しており、また[2]の直後でセイによる富と価値の混同を批判するときにもセイの名前を明示して批判している。つまり他者の理論を批判するときはその主張者の名前を明示するのがリカードの批判方法なのである。ところがリカードは[2]ではスミスを含め誰の名前もあげていない。なぜリカードはスミスに言及しなかつたのであろうか。また[2]の文章の書き方を見ても、リカード自身の見解をストレートに述べており、他の誰かの見解を批判するという書き方になっていない。リカードはスミスの見解を批判したのであろうか。

本稿の結論を先取りするならば、この点についてスミスとリカードに見解の根本的な対立はなく、リカード[2]はスミス[1]の批判というよりもむしろ補足説明であったように思われる。以下、本稿の第2節と第3節では、スミスが生産物の価値増加について述べた『国富論』第2編第3章の2つのパラグラフの論理展開を詳しく検討して、スミスの真意について考える。

2. 生産力価値説とは何か——『国富論』第2編第3章第32パラグラフの検討

スミスの生産力価値説について述べられた上記の引用文[1]は、『国富論』第2編第3章第32パラグラフの冒頭部分である。以下では第32パラグラフの全体（引用文[4]、冒頭部分は[1]と同じ）を検討する。

[4] (第32パラグラフ, [] 内は引用者による補足)

「ある国の土地と労働の年々の生産物の価値を増やすには, [1] その国の生産的労働者の数を増やすか, [2] これまで雇用されていた生産的労働者の生産力を増やす以外には方法がない。[1の説明] 生産的労働者の人数は, 資本すなわち生産的労働者の維持に向けられる元本の増加の結果以外には大きく増加させることはできないことは明らかである。[2の説明] 同数の労働者の生産力は, [2A] 労働を容易にしたり短縮したりする機械と道具の追加と改良か, [2B] 雇用のいっそう適切な分割と分配〔分業〕の結果以外には, 増加させることはできない。[2Aと2B] いずれにしても, 追加的資本がほとんどいつも必要である。追加的資本によってのみ, どんな事業の企業家も, [2A] 自分の職人により良い機械を与えたり, [2B] かれらの間にいっそう適切な仕事の分割〔分業〕を与えることができる。[2Bの説明] なされる仕事が多くの部分から構成されているときに, [①分業が成立して] すべての人がそれぞれいつも1つのやり方で雇用され続けるためには, [②分業が成立せず] すべての人が仕事のあらゆる異なる部分にときどき従事するよりもはるかに大きな資本〔とそれが雇用する多数の生産的労働者〕を必要とするのである。」(WN, II, iii, 32 : 343, 訳 I : 536)

(The annual produce of the land and labour of any nation can be increased in its value by no other means but by increasing either the number of its productive labourers, or the productive powers of those labourers who had before been employed. The number of its productive labourers, it is evident, can never be much increased, but in consequence of an increase of capital, or of the funds destined for maintaining them. The productive powers of the same number of labourers cannot be increased, but in consequence either of some addition and improvement to those machines and instruments which facilitate and abridge labour; or of a more proper division and distribution of employment. In either case an additional capital is almost always required. It is by means of an additional capital only that the undertaker of any work can either provide his workmen with better machinery or make a more proper distribution of employment among them. When the work to be done consists of a number of parts, to keep every man constantly employed in one way requires a much greater capital than where every man is occasionally employed in every different part of the work.)

スミスは, 上記の引用文[4]の冒頭([1]と同じ)で, 一国の生産物の価値を増加させる方法として, [1] 生産的労働者の数を増やすか, または, [2] 生産的労働者の生産力を高めるという2方法をあげている。これらのうちでとくに大きな問題となってきたのは[2]の方法である。というのも, 投下労働価値論を前提とすれば, 労働量が一定である限り生産力が上昇しても価値量は一定であり増加しないはずだからである。しかしスミスは, [2]の方法も「価値を増加させる」という。スミスがなぜそう考えるのかについて, かれの説明を聞こう。

スミスは, 生産力を高めて生産物価値を増やす[2]の方法を, さらに, [2A] 機械や道具の使用と, [2B] 分業の改善とに分けて説明している。重要なことは, [2A] と [2B] のいずれの方法も, 生産力を高めるために追加資本と生産的労働者の追加雇用を必要とすることである。まず, [2A] 機械や道具を使用するためには, 機械と道具を購入するための追加資本が必要であり, さらにそれらの機械や道具を生産するための生産的労働者の追加雇用も必要である。

また[2B] 分業の改善にも, 生産的労働者の追加雇用と, そのための追加資本が必要である。このことはスミスの分業論を考えれば容易に理解できるであろう。たとえば, 分業が存在せず, 1人の労働者が農業と製造業に交互に従事する状態を考えよう。追加資本によってもう1人の生産的労働者を雇用できれば, 合計2人の生産的労働者による分業が可能となり, それぞれが農業と製造業に特化して熟練するので

労働生産力が高まるであろう。同様にして、100人の生産的労働者を雇用する状態に比べて、追加資本がさらに100人の生産的労働者を雇用して合計200人を雇用する状態になれば、分業はいつそう発展して各人の作業がより細分化され、労働生産力は高くなるであろう。つまり、これまで雇用されていた生産的労働者の生産力を高める方法とは、追加資本によって生産的労働者を追加雇用して、生産的労働者の人数を増加させることなのである。

したがって、スミスが引用文〔1〕と〔4〕で述べている生産物価値を増加させる2方法は、いずれも追加資本によって生産的労働者の雇用数を増加させることを前提条件としている。そして第1の方法は生産力が一定のまま生産的労働者数を増加させ、第2の方法は生産力を高めつつ生産的労働者数を増加させるのである。いずれの方法でも、生産物の価値が増加するのは生産的労働者の雇用数が増加する結果である。注意すべきは、第2の方法で生産物価値が増加するのは、労働生産力の上昇それ自体の結果ではなく、労働生産力を上昇させるための前提条件である資本増加とその資本によって雇用される生産的労働者数の増加の結果だということである。

このように考えるならば、リカード〔2〕はスミス〔1〕を批判するものではなく、むしろ補足していることがわかる。整理すると、2人が富の増加の原因として考慮しているのは、①労働生産力、②生産的労働者数（および生産物価値）の2要因であり、これら2要因の変動について、以下の3通りの組み合わせがありうる（2要因がともに変化せず一定の場合を除く）。

- (1) 労働生産力一定、生産的労働者数増加（＝生産物価値増加）
- (2) 労働生産力上昇、生産的労働者数増加（＝生産物価値増加）
- (3) 労働生産力上昇、生産的労働者数一定（＝生産物価値一定）

スミス〔1〕は、富と生産物価値を増加させる2方法として(1)と(2)を対比しており、(3)には言及していない。リカードはスミス〔1〕における(3)の欠落に気づき、引用文〔2〕では、富を増加させる2方法として、生産的労働者数と生産物価値を増加させる(1)および(2)をひとまとめにして、それと生産的労働者数と生産物価値が一定で労働生産力だけが上昇する(3)を対比させている。したがって、リカード〔2〕はスミス〔1〕への批判というよりも、むしろスミス〔1〕に欠けていた(3)の労働生産力上昇が価値を増加させない場合を補足したのではないであろうか。

くりかえして言えば、この点についてスミスとリカードに見解の相違はなかったと思われる。2人とも、生産物価値を増加させるためには生産的労働者数の増加が必要であると考えていたし、労働生産力の上昇がそれ自体として生産物価値を増加させるとは考えなかったのである。

ただし疑問が1点残る。スミスはなぜ(3)に言及しなかったのであろうか。(3)を認識すること自体はさほど困難とは思われない。生産的労働者数が一定であっても、労働者の一定数を機械・道具・原材料の生産に振り向ければ生産力は高まるし、あるいは労働者を分業のない協業（いわゆる単純協業）から分業のある協業（複雑協業）へ転換しても生産力は高まる。つまり資本や労働者数が一定でも生産力を高めることはできるし、逆に生産力が高まるからといって資本と労働者数が増加するとは限らないのである。

スミスが(3)の可能性にまったく気づかなかったとは考えにくいし、気づいていた可能性もある。というのも、かれは〔4〕で生産力を高める2方法について説明するときに、「追加的資本がほとんどいつも（almost always）必要である」と述べて「ほとんど」という限定を加えているからである。これは追加資本や追加労働者がなくても生産力を高めることは可能であるとスミスが認識していたことを示唆している。

では、もしスミスが(3)の可能性に気づいていたのならば、なぜかれはそれを明示的に述べなかったので

あろうか。スミスは(3)の可能性を認識していたにもかかわらず、あえて(3)に言及しなかったのではないかと考えられる。その理由は、以下で示すように、第2編第3章全体にこめられたスミスの意図を検討することによって推測可能である。

3. 生産的労働と価値——『国富論』第2編第3章全体の検討

スミスは、『国富論』で国民の富の増加についてくりかえし考察している。国民の富の増加こそは『国富論』のもっとも中心的な主題であった。しかしスミスが国民の生産物の価値の増加について論じているのは、『国富論』第2編第3章の第1, 32, 35の3パラグラフだけである。前節では、第32パラグラフについて検討した。以下では、第1および第35パラグラフについて検討し、第3章全体にこめられたスミスの意図について考察する。

スミスは、第3章の冒頭で、生産的労働と価値増加の関連について次のように述べている。

[5] (第2編第3章第1パラグラフ)

「労働には、それが投じられる対象の価値を増加させる種類のもの、そのような効果を生じないもう1つの種類のものがある。前者は価値を生産するので生産的労働と呼び、後者は不生産的労働と呼ぶことができる。」(WN, II, iii, 1 : 330, 訳 I : 515-516)。

つまりスミスによれば、「生産的労働」は価値を生産し増加させる労働であり、「不生産的労働」は価値を生産せず増加させない労働である。スミスはすべての労働を生産物の価値増加に寄与するか否かという1点を基準として2種類に分けている。この労働の区別を前提とすれば、価値を増やすには価値を生産する生産的労働者を増やすことが必要であり、そのためには生産的労働者を雇用する資本を増やさなければならない。これが『国富論』第2編第3章の基本論理であるように思われる。この論理は、以下の第35パラグラフにおける生産物の価値増加の方法に関する説明でも明確に示されている。

[6] (第2編第3章第35パラグラフ)

「革命以来、さまざまな機会に、この国の土地と労働の生産物の非常に大きな部分が莫大な人数の不生産的労働者〔兵士——引用者〕を維持するために用いられてきた。しかしこれらの戦争がこれほど大きな資本をこの特定方向に向けなかったならば、資本のより大きな部分が自然に生産的労働者を維持するために使用されたであろうし、その労働は生産的労働者の消費の全価値 (whole value) を利潤とともに回収したであろう。それによって、国の土地と労働の年々の生産物の価値は毎年かなり増加させられ、毎年の価値の増加は翌年の価値をいっそう増加させたであろう。」(WN, II, iii, 35 : 345, 訳 I : 540)

(So great a share of the annual produce of the land and labour of the country has, since the Revolution, been employed upon different occasions in maintaining an extraordinary number of unproductive hands. But had not those wars given this particular direction to so large a capital, the greater part of it would naturally have been employed in maintaining productive hands, whose labour would have replaced, with a profit, the whole value of their consumption. The value of the annual produce of the land and labour of the country would have been considerably increased by it every year, and every year's increase would have augmented still more that of the following year.)

この引用文[6]において、スミスは資本を生産的労働者の雇用へ向けることによって「土地と労働の年々

の生産物の価値」が増加すると述べており、ここでは生産物の価値増加の原因は生産的労働者数の増加だけである。この引用文〔6〕と比べるならば、前節で検討した引用文〔4〕（第32パラグラフ）におけるスミスの意図もより明確になるように思われる。というのは、スミスが〔4〕において生産物の価値増加の方法として生産力の上昇をあげた上でそれを資本および生産的労働者数の増加に帰着させたのは、〔5〕と〔6〕に示された第3章全体の基本論理に沿うものだったからである。

さらに、以上の考察をふまえるならば、スミスがリカードの指摘した(3)のケース、すなわち生産的労働者数一定（＝生産物価値一定）で、労働生産力が上昇して富が増加するケースにおそらく気づきながらもあえて言及しなかった理由を推測することも可能である。というのは、もし生産的労働者数一定でも労働生産力の上昇によって国民の富を増加させることができるならば、スミスが強く主張していた不生産的労働者（兵士や召使い）の生産的労働者への転換を行わなくても国民の富を増加させることは可能であるという反論に根拠を与えることになりかねないからである。おそらくスミスは、そうした反論の可能性を未然に防ぐために、生産的労働者数一定でも生産力が上昇するというケースにあえて言及しなかったのではないであろうか。

4. むすび——生産力・価値・経済成長

スミスが『国富論』で考察した中心主題は、諸国民の富を増加させる原因とは何かであった。そしてかれは、富の増加の2原因である労働生産力と生産的労働者数について、それぞれ第1編と第2編で別個に考察した。すなわち第1編では生産的労働者数と価値の増加を理論的に捨象して労働生産力の上昇だけを考察し、次の第2編では第1編で捨象された生産的労働者数と価値の増加を主として論じたのである。

富増加の主要2原因である労働生産力と生産的労働者数と、富および価値の増加の関連についてスミスの見解の要点を再確認しておこう。第1原因の労働生産力は富を増加させるが価値を増加させず、第2原因の生産的労働者数は価値とそれに比例する富を増加させる。もし2原因がともに働けば、富は相乗的に増加することになる。たとえば労働生産力と生産的労働者数がいずれも2倍になれば、価値は2倍になり、富は $2 \times 2 = 4$ 倍になるのである。

最後に、生産力価値説の積極的な意義について補足しておきたい。星野氏による生産力価値説の問題提起の根底にあるのは、労働価値論によって経済成長をどのように説明するのかという根本問題である。リカードとマルクスの労働価値論では、総投下労働量が一定の場合には総価値が一定となるので、資本蓄積を説くことはできて経済成長を説くことは困難であった。リカード『原理』にもマルクス『資本論』にも、資本蓄積論はあっても経済成長論はなく、今日でもリカードとマルクスを継承する経済学者たちは資本蓄積を論ずることに熱心でも経済成長を積極的に論ずることは少ない。これは新古典派成長論とそれに基づく経済政策論（構造改革論や成長戦略など）が大きな影響力を有する一因となっているように思われる。

他方で、スミスの労働価値論は価値増加を認めるので、資本蓄積論だけでなく経済成長論を説くことができる。これこそ星野氏がスミスの生産力価値説を高く評価する最大の理由であるように思われる。実際、今日、労働価値論を基礎として経済成長を論じようとするときに、スミスから学ぶべきことは多いように思われる。最後にこの点について若干の仮説的私見を述べてむすびにかえたい。

投下労働価値論を前提とすると、総労働時間一定なら総価値一定となり、貨幣価値が一定なら総価格も一定となる。現代的な用語で表現すると、名目GDPは増加せず名目成長率はゼロとなるであろう。この場合に、労働生産力（労働生産性）が上昇すると同じ割合で生産物価値が低下し、貨幣価値が一定ならば同じ割合で物価も低下するであろう。それゆえ、実質成長率＝名目成長率－物価上昇率＝労働生産性上昇率、

となる。

しかしスミスの時代にGDP統計や物価統計はなく、富の増加を社会的に集計して異時点間で比較することは困難であった。スミスはどのように論じたのであろうか。スミスは富の増加について2つの方法で論じた。1つは資本蓄積論であり、本稿で考察したように、スミスは労働生産力上昇による富の増加は、「ほとんどつねに」資本の増加を前提としていると主張することによって、経済成長論を事実上資本蓄積論へ還元した。

しかし『国富論』第1編で述べられているように、そして本稿でも検討したように、資本蓄積と生産的労働者の増加を必ずしも前提としなくても、分業の発展による労働生産力上昇によって富の増加すなわち実質的経済成長は可能である。この場合について、スミスが工夫したもう1つの説明方法が支配労働＝価値尺度論であった。

スミスは、価値尺度となる支配労働について、購買する商品に投下された労働（支配投下労働）と雇用労働（支配賃労働）とを明確に区別しなかった（新村 1988a）。これはスミスの理論的限界であるが、実質的経済成長を論ずるためには一定の意義があったと言えるかもしれない。年々の総生産物の価値を支配投下労働（支配する商品に投下された労働）で尺度する場合には、総投下労働量が一定ならば総価値は増加しない。しかし支配賃労働（支配する生きた労働）で尺度する場合には、賃金の価値が低下するならば（つまり労働生産力上昇率よりも実質賃金増加率が低い場合には）、総労働量が一定でも、支配賃労働で尺度した総価値は増加することになる。つまり総投下労働量が一定でも、富の増加つまり実質的経済成長をこの支配賃労働によって尺度し集計することが可能となったのである。

[付記]

2018年7月28日に立教大学でリカード研究会（第37回）が開催され、星野彰男著『アダム・スミスの動態理論』（関東学院大学出版会、2018年）の合評会が行われた。最初に、佐藤滋正氏（尾道市立大学名誉教授）が同書全体の内容を紹介してコメントされたあと（佐藤 2019参照）、私が論点を絞って報告をさせていただいた。本稿はその報告を改訂したものである。論点を1つに絞って議論しているのので、書評ではなく研究ノートとさせていただいたが、星野彰男著『アダム・スミスの動態理論』を本稿とともに参照していただければ幸いである。

[参考文献]

- Ricardo, D., 1951 (orig. pub. 1817), *On The Principles of Political Economy, and Taxation*, edited by P. Sraffa, Cambridge: Cambridge Univ. Press. (堀経夫訳『経済学および課税の原理』雄松堂書店, 1971年)
- Smith, A., 1976 (orig. pub. 1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (abbreviated as WN), Clarendon Press, Oxford. (大河内一男監訳『国富論』I～III, 中央公論社, 1976年)
- 佐藤滋正, 2019, 「書評：星野彰男『アダム・スミスの動態理論』」, 『経済学史研究』61(1), 7月刊行予定。
- 新村聡, 1987, 「リカードのスミス価値論批判」, 『岡山大学経済学会雑誌』19(1), pp.75-101。
- 同, 1988a, 「古典派労働価値論の成立」, 米田康彦・新村聡・出雲雅志・深貝保則・有江大介・土井日出夫『労働価値論とは何であったのかー古典派とマルクスー』創風社, 第1章, pp.9-44。
- 同, 1988b, 「スミス価値論とリカード, マルクス」, 関東学院大学『経済系』(155), pp.42-55。
- 同, 2003, 「書評：星野彰男『アダム・スミスの経済思想－付加価値論と「見えざる手」－』」(関東学院大学出版会, 2002年刊), 『経済学史学会年報』(43), pp.110-111。
- 同, 2012, 「書評：星野彰男『アダム・スミスの経済理論』」(関東学院大学出版会, 2010年刊), 『経済学史研究』53(2), pp.128-129。
- 星野彰男, 2002, 『アダム・スミスの経済思想－付加価値論と「見えざる手」－』関東学院大学出版会。
- 同, 2010, 『アダム・スミスの経済理論』関東学院大学出版会。
- 同, 2018, 『アダム・スミスの動態理論』関東学院大学出版会。